

第49回日本看護学会—看護管理—学術集会開催

「未来に向かって“つなぐ”をマネジメントする」をメインテーマに

第49回日本看護学会—看護管理—学術集会が、2018年8月9、10日の2日間にわたり、仙台国際センターを会場に開催された。学術集会会長は宮城県看護協会会長・佃祥子氏が務め、延べ約4500名が参加した。

メインテーマは「未来に向かって“つなぐ”をマネジメントする」。2025年に向けて社会保障制度改革が進められる中、看護職が他職種と連携し、住み慣れた地域でその人らしく暮らしていける社会を目指し、いのち・暮らし・尊厳を守り支える看護の役割を考察する多彩なプログラムが企画された。（本誌編集室）

看護師のキャリアと管理者の役割

基調講演では「未来に向かって『つなぐ』をマネジメントする～看護専門職としてのキャリアマネジメント～」として、日本看護協会会長の福井ト子氏が登壇。地域包括ケアや地域医療構想の推進に向けて、看護職員数の確保とともに、活躍の場の多様化への対応が求められる。その中で、どのようなキャリア形成を目指していくのかを述べ、「60歳でキャリアを終えるのはもったいない」と呼びかけた。

また、日本看護協会が作成した「看護職のキャリアと働き方ガイド」を紹介。従来の看護職員の主な勤務先であった病

院などの医療機関を中心としたキャリア形成だけでなく、多様なキャリアパスや働き方が示されるとともに、看護管理者には強みに焦点を当てるキャリアマネジメントと、ワーク・ライフ・バランスへのサポートを求めた。

地域包括ケアをマネジメントする

シンポジウムⅠでは「地域包括ケアをマネジメントする方法『つなげる・つながる』—住民の命・生活・人生を支える看護管理実践力のコアに」(座長：東北大学大学院・大森純子氏)をテーマに、それぞれの地域の実情や特性に応じて、どのように地域包括ケアをマネジメントするか、そして、その方法をいかに看護管理実践力に位置づけるかが議論された。

中でも講師として登壇した千坂栄美子氏(宮城厚生協会古川民生病院)は、地域包括ケアシステムの構築を進める上で重要なキーパーソンになり得る職種は看護職であり、看護職同士の顔が見える関係づくりが重要とした。また、地域での看看連携と多職種連携における課題として、情報共有の問題を指摘。講演に続いて行われたディスカッションでは、サマリーや情報共有シートの作成などについて活発な意見交換が行われた。

都市部と地域をつなぐ

“つなぐ”をキーワードとした今回の学術集会では、地域連携に関する演題も多く見られた。地域包括ケアの構築における医療人材の格差の課題を扱ったシンポジウムⅢ「看護職の地域偏在の解消に向けて都市部と地域をつなぐ」(座長：日本看護協会・鎌田久美子氏)では、宮城県看護協会が取り組む「助産師人材交流促進・資質向上事業」をはじめとする各地域での人材確保の事例が報告され、都市部と地方での人材交流や出向などによる活動を人材の地域偏在解消の解決策の

1つとした。

シンポジストとして登壇した上田順子氏(北海道看護協会)は、北海道における出向システム「地域応援看護師確保対策事業(地域応援ナース事業)」を紹介。北海道は都市部に人口が集中し、医療従事者の地域偏在が著しく、特に冬期の人材確保に苦労している地域が多い。その解決策として、地域応援ナース事業を通して、都市部から看護職不足地域の医療機関などへの看護職派遣に取り組んでいるという。他県からの応募も増え、派遣終了後に応援先施設に就職するといった成果が上がっており、上田氏は北海道全体での「看護職確保」と「人材育成」の有効な手段となっていると報告した。

東日本大震災の関連企画も

東日本大震災の被災地である仙台市での開催となった今回は、震災に関連した企画も催された。「3.11の教訓、命の尊さを未来へつなぐ」をテーマとするシンポジウムのほか、展示企画「東日本大震災からの教訓を未来へつなぐ 私たちはあの日を忘れない! 宮城の看護職から『防災・減災』に向けて発信」では、震災から7年間の看護職の活動と復興状況を紹介した。自然災害が多発している昨今、東日本大震災を経験し、防災や減災に向けた教訓を発信するとともに、次の世代につなぐ重要性を考える機会となった。

次の第50回学術集会は、2019年10月23、24日、愛知県名古屋市の名古屋国際会議場を会場に開催される予定。

